

8. 水産伝習所で学ぶ仲治郎～明治 23-24 年

二男の仲治郎は 1872（明治 5）年に生まれ、根本小学校卒業後 16 歳で上京し、佐野英語学校に 1 年間学んだ後、1890（明治 23）年 1 月、水産伝習所の本科生および予科生各 80 名の募集があり仲治郎は予科に応募した。1 月 23～24 日に本科の受験があり、15 名中 13 名が合格した。予科は 1 月 28～29 日におこなわれ 39 名中 31 名が合格した。予定数に達していないので補欠募集と試験がおこなわれ、本科 20 名（第 2 回生）と予科 54 名の計 74 名が入学した。

仲治郎らの予科入学生は 1 年半の修業後に第 3 回生卒業となった。水産伝習所の沿革では予科 2 月入学で 7 月修業となっているが、実際に手元にあるものは「第五號 修業証書 千葉縣平民小谷仲次郎 本所規定ノ豫科修業候事 明治廿三年十月廿五日 大日本水産會水産傳習所長 從六位勲四等 關澤明清」と、修業は 10 月である。引続き本科となるが入学月がわからない。本科の卒業は沿革で明治 24 年 8 月となっているが、「第拾九號 卒業證…水産傳習所規定ノ學科ヲ修メ卒業セシコトヲ證ス 明治廿四年九月十五日…」と、卒業が 9 月 15 日となっている。

仲治郎は在学中からすでに、5 歳上の兄源之助とともに、東京における金澤屋の事業を手伝っていたようである。伝習所の教員をはじめ同級生や同窓生との交友関係が、金澤屋にとって重要なネットワークになっていることも書簡から読み取れる。源之助もまた、仲治郎から紹介されて親交を深めながら、積極的に金澤屋の商取引につなげていった様子が見てとれる。伝習所の創立関係者には、清三郎が水産博覧会で乾鮑の褒状を受賞したことを知っている者や、金澤屋とすでに取り引している事業者もいた。代表的な人物は、海産物問屋の安達重助や渡辺福三郎、靱山半三郎などである。

創立当初から国の財政支援が少なかった伝習所は、財政的に困難な状況があり存続が危ぶまれていた。入学者の大半は水産事業者の子弟であり、運営を維持するためには親から支払われる月謝が頼りであった。月謝は高額であるうえ納入の遅れや滞納は許されなかった。1890（明治 23）年の仲治郎から清三郎宛ての 6 月 5 日付書簡【30】には、「…学校モ三日ヨリ芝ニテ相始メ…」とあり、この年に水産伝習所は芝区三田四国町 2 番地内第 1 号地にある建物を買受け、5 月 31 日と 6 月 1 日の両日で移転し、6 月 3 日から授業を開始したと沿革にあるので、書簡とは同じである。

そして、書簡には「…当時者一体ニ不景氣にて、特更御商法モ不好し、非常之御困難と存じ日々案じ居り申候…」と書かれている部分は極めて重要で、明治において初めて起った資本主義的な「明治 23 年恐慌」を伝えている。仲治郎の水産伝習所時代は、明治期日本経済の景気変動の真ただ中であつた。鉄道や紡績などで多くの会社企業が勃興したことで、1889（明治 22）年の夏以降、会社企業の資本金払込が集中し、また米生産の不作にともなう米取引が頻繁に行われたので、資金需要が急増していった。1891（明治 24）年の初めまで金融の逼迫が続き、新規の会社企業が破綻していった。とくに機械制工業である綿糸紡績業をみると急速な成長の結果、過剰生産による不況に見われ、明治 26 年の後半に回復の兆があらわれ、翌年景気が回復していった。

仲治郎から清三郎・たよに宛てた書簡には、伝習所月謝の送金依頼や袴・羽織などの送付、勉学のための資金の催促、生活の困窮を訴える内容が多い。仲治郎も金澤屋の仕事を手伝っていたようで、明治 23 年から 24 年の経済的な不況時の金澤屋の事情や親類関係のことが記載されている。

仲治郎の伝習所時代の書簡は、1890（明治 23）年が 5 通、翌年に 8 通と計 13 通存在している。伝習所の芝区三田四国町への転居決定情報がある 5 月頃の書簡【214】では潜水器械が高値で落札できなかったことや山崎に成績表を廻すことが書かれている。6 月 5 日付書簡【30】では、社会全体不景気で「…御商法モ不好し、非常之御困難…大黒屋様之御話しモ有之、実ニ心痛仕り候…」のことや、伝習所が三田四国町に移転し 6 月 3 日より授業開始ということ、そして「…兄上モ御事ハ充分

勉強被成候事と存じ候間、御安心可被成…」とあり、源之助が佐渡での取引拡大に向けて調査しながら取り組んでいることを示唆しているのか。書簡【19】では「…はかま・羽織共大至急御送り願度 [欠損] 六日頃試験終り…」とあり、7月初め頃の書簡と思われる。水産伝習所の規則には、生徒は必ず羽織、はかま、あるいは洋服を着用して品位を高めるよう訓示されていたが、仲治郎は持っていなかったようで、行事等の時に清三郎のものを借りていた。

水産伝習所書記石原重資の書簡【173】は貴重な資料で、前半が欠損し内容が不明であるが、第1回生の白浜実習（8月3日から29日まで）に対する何らかの依頼があったのではないと思われる。白浜村で実施される実習には教員の内村鑑三が引率するが、第3回生在籍中の仲治郎を通じての協力要請である。断片書簡のうえに欠損が多く、肝心な部分が不明であるものの「…半数ハ大海江、跡者当白浜村七島屋江着致し候、当地江者内村教師出張之筈ニ候処…同氏も□ニハ着相成候事与□□貴君ニハ当地□□□底之義ニ付、□□□御越、種々御話□□□度候、此段御報□□□如茲御座候也」という内容である。本来の伝習所からの正式依頼文書ではないが、乾鮑製造が実習となると、やはり現地の指導者が必要であり、清三郎が依頼されてもおかしくない。この年に清三郎は第3回内国勸業博覧会の水産部門において、乾鮑（明鮑）製造で褒状を授与されていることから、現地実習への協力要請があったと推察する。後に水産伝習所から清三郎宛に1893（明治26）年7月18日付での書簡【271】があり、それは夏期演習として乾鮑製造の現地実習の正式依頼文書である。内容は「一九二号 拝啓 炎暑之折柄、愈御清栄敬賀此事ニ御座候、陳者、来ル廿五日頃ヨリ、当所生徒夏期演習トシテ、昨年ノ如ク白浜并天津両所エ差遣候、就而ハ、貴所エモ罷出可申、其節ハ依例御教示被下度希上候、此段得貴意候也」とあり、「昨年ノ如ク」とあるので白浜で行われたときは、清三郎が現地実習の指導者として要請されていた。

なお、内村鑑三は1890（明治23）年8月の夏期演習を振り返って、自著全集に「予が聖書研究に至りし由来」を書き、隣接した布良（館山市布良）の神田吉右衛門と毎日語り合ったことが契機となって伝習所教員を辞し、キリスト者として生きる決意をしたと述べている。この現地実習は布良でもおこなわれ、後に画家・青木繁の滞在を受け入れた小谷喜録がマグロ延縄の漁具指導をしている。小谷家には伝習所長・関澤明清から贈られた感謝状と「日本重要水産動植物之図（農商務省制作）」が今も残っている。

さて、11月16日付書簡【301】から仲治郎は保証人岩佐氏の応援により東京市松原町で下宿生活をしていたと思われる。「…日光行の義、本月下旬か来月上旬に出張之趣相達し、実ニ驚き入り候、旅行費ハ六円内外と（之カ）事ニ候、御困難之折柄申上候…」とあり、金澤屋が「困難之折柄」にあって、冬期演習の日光中宮祠湖実習の多額の旅行費用を心配している。翌1891（明治24年）に入って1月14日付書簡【79】では、親類の四ノ宮（土佐）いわが近隣に居住しており、たびたび「…御いは様にも目下一文なしにて非常に困難罷り在り候ニ付、何卒金員の義、大至急御送り…」という一文が見受けられ、その状況が不明である。加島宣晋宅にらくを奉公させようという急な話が持ち上がり源之助は賛成しないと伝えるとともに、書籍を買いたいが一文もなく困っていると嘆いている。2週間後の1月28日付書簡【135】は困難な時にお金が届いたので感謝しているが、「…おいは様にモ四の宮氏より者、屢々送金無之、目下非常ニ困難罷り在り…夜具の義者、山口なる者へ貸し候処、しきぶとん一枚返し不申、誠ニ困り居り申候、尤モ七月中小生不在の節、持ち行き候モノニ御座候…」など、いろいろな問題を訴えている。

3月12日付書簡【268】では、「…此御方ハ伝習所教員を被成居候、此度房州海草買入の御見込有之、態々御渡航被成候…」と、教員岡村金太郎から海藻調査の依頼があったことを伝えている。3

月21日付書簡【144】では、「…伝習所月謝之義ニ付、数度書面差上候へしが、未ダ御送付無之、尤モ御困難中の事故、御都合モ有之候事…」と不満を募らせ、月謝納付規則が3月25日期限で非常に困っているのが、着物を質入れしてお金をつくったとの書簡は、5月25日付書簡【80】のなかで「…去ル二十一日頃書状(欠損)上候へしが、嘸々御立腹之事と存じ後悔罷り在り候、尤モ当時(欠損)御送金無之、況して先月分の月謝モ滞り、実ニ学校の方へ(欠損)申訳け無之、夫レ故小生モ心配の余り遂ニ斯ル事申上、実ニ申訳け(欠損)何卒不悪、過日の書面者御捨て被下度、此段不悪奉謝候…」と、清三郎への不満が言い過ぎてしまったことを詫びている。「…おいは様ニモ五円計りの宿料残金有之、小生者(欠損)あてことに致し居ル様子、且ツ四の宮氏よりハ一銭モ送らさる由にて、非常ニ困難致し居り、加之小生の単衣物二枚とモ質に入れ…」るという状況を伝えている。7月15日過ぎの書簡【226】と思われるが、5円の送金を感謝し、7月16日から25日まで最後の試験があり、7月26日か27日には送別会があると述べている。卒業前の7月付書簡【32】では「…おいは様へノ勘定残金四円、おいは様も目下御困難さニ御座候ニ付、早々御送り…」と、いはとはお金のやり取りの書簡が多いが、仲治郎とどんな関係であったかが不明である。本科第3回卒業が決まって、「はかまと羽織」を至急送ってほしいことや、8月1日より第4回生とともに駿河興津実習に参加することを報告している。

7月25日付書簡【78】では、金澤屋が「…御困難ノ中…」にあつて、仲治郎は部屋の家賃滞納のことは、保証人岩佐氏の借用書で対応してもらったようで、「…若シや財産取押へ等の事有之候て者、誠ニ岩佐氏へ対し申訳け無之次第…」と述べている。月謝だけでなく家賃も滞納し困窮な状況にあつたとわかる。そんな中で「…兄上の不始末ハ、重々小生ヨリ鳴謝仕り候…」という源之助の不始末とは、明治23年に一体どんなことがあつたのだろうか。

水産伝習所に関わる仲治郎の書簡で卒業後のものが3通ある。卒業翌年の5月13日付書簡【225】では、3月12日付書簡後の岡村の海藻調査依頼の件、続いて6月2日付書簡【31】も、岡村の「わかめ」(昆布)再調査依頼である。8月5日付書簡【108】は、第3回生の同窓江尻伊之助より、第5回生の穂波(遠山亀三郎)が夏期実習に関わり房州での調査に協力してほしいと依頼された件で、この穂波の父親は佐賀戦争で討ち死しており、「山崎の村」も知っているが清三郎に報告している。

「山崎の村」の山崎のことは後述するが、山崎峰次郎と清三郎とは親しい関係であり、どのような経緯で知り合いになったかを解いていく手掛かりになるかもしれない。

ところで、前述の岡村に関わる書簡は、1892(明治25)年12月25日刊行の『大日本水産会報』(第126号)の「房州の海藻に就て」と題した岡村金太郎(石川縣 大日本水産會員)の寄稿に繋がっている。論文の最初には根本村での調査活動の経緯が書かれ、最初に「今年八月一日より三日間海藻採集の爲め房州に旅行せり斯く僅々兩三日の日數を以て…今にして行かざれば暫くは又行く能はざるべしと思ひ居る處に會々水産傳習所生徒數十名實地演習の爲め房州布良根本より天津地方へ旅行するものあるを以て之と行を共にし即ち一日館山に航し布良に一泊し翌二日布良より根本迄の間を採集し傳習所第三回卒業生小谷仲次郎氏の根本にて潜水器を以て採鮑の行を營めるに依り氏に依頼して數種を得翌三日根本より直に歸京したり左に列記せる數種は即ち倉卒一日の間に採集したるものなれば數の元より多かるべき筈なけれども幸に一二の珍種ありたり依て左に録して他日研究の資となす」と書いている。

そして、「傳習所第三回卒業生小谷仲次郎氏の根本にて潜水器を以て採鮑の行を營めるに依り氏に依頼して數種を得」とあり、1891(明治24)年9月15日に卒業した仲治郎は、翌年から本格的に金澤屋の仕事に取り組んでいるので、その合間に対応していた。この一文に関わる書簡2点は論

文のこともあるので重複するが紹介したい。5月13日付の仲次郎書簡【225】では出先の佐渡から一時帰宅していた源之助に対して「若布一籠伝習所名宛…正ニ受取申候、岡村先生よりモ呉々モ御礼有之候、小児のほうづきにする若布者、全々若布(わかめ)の種類にて者無之、一種の昆布(こんぶ)に有之趣き被申候…尚、此昆布ニ付き、生殖の(実の出来る事)方法等ニ付き取調べ度由、尤モ今より一ヶ月モ先きより御取り、御送り被下度願上候…」と具体的な調査方法を依頼している。また、6月2日付の仲次郎書簡【31】では、清三郎に対して潜水器を使用しての再調査を依頼している。「…植物科教員岡村金太郎君よりの御依頼にて、先達御送り被下候わかめ即ちほふづきわかめ(実ハ昆布)の生殖ニ付、是非共今一度取調べ度候ニ付、海の深サ。陸を去ル何里位。極大なるモノ幾尺ニ至ルヤ。幾頃芽ヲ出すや。等其外種々御取調べ御送り被下度、わかめ者伝習所宛にて御送り被下度候、此わかめ者今頃種ヲ持つモノニ御座候、但シ根付きの儘にても此わかめ者群りあるものなりや、或ハ散在致すものなりや、何卒精しく御取調べ御送り被下様願上候…」とあり、海藻の専門的な調査活動に協力していくことになる。

これらの書簡から、後に海藻学の第一人者となる岡村の研究過程において、仲治郎はじめ清三郎など潜水器械船を持つ金澤屋の全面的な調査協力があつて研究の成果をあげていった。1901(明治34)年に水産講習所館山実習場が開設されると、岡村の調査研究はさらに進み世界的な評価を得ていく。海藻は鮑の餌でもあり、仲治郎は、岡村の海藻調査研究に触れたことは、渡米後の潜水器採鮑の調査に活かされていったと推察される。

このようにみると源之助・仲治郎兄弟が渡米して、採鮑事業や乾鮑製造に関わることになった背景の一つとして、父親の清三郎が農商務省や大日本水産会から乾鮑製造の専門家として高く評価されていた人物であったことや、水産伝習所の夏期演習の現地実習講師に依頼されるような存在であったことが関係しているのではないかと推察される。海藻学者岡村金太郎や後述する岸上鎌吉らの調査研究活動の協力などが関係しているのではないかと推察される。

水産伝習所を卒業した仲治郎が、1892(明治25)年頃から本格的に金澤屋の仕事に取り組んでいる姿がみえる。十分な勘定書の枚数はないので断定できないが、明治20年頃から横浜の萬屋辻孝助との取引が増え、清国貿易の輸出品に金澤屋の乾鮑を扱っている。勘定書には洋銀相場の記載がなくなっているのが、貿易システムが変わった時期である。この頃の支払覚はほとんど清三郎宛であるが、明治25年頃から仲治郎宛も出てくるので、結婚前20歳の仲治郎は清三郎に代わって海産物貿易商との取引を仕切っていく立場になったのであろう。

ここで年が未詳だが、小野友五郎という人物から仲治郎宛ての貴重な書簡を2通紹介したい。小野友五郎は1817(文化14)年の生まれの常陸国笠間藩士であり、幕末に測量・航海術に精通するため幕府海軍伝習所に学び、日米修好通商条約批准書交換使節団では咸臨丸艦長勝海舟を補佐する航海長として米国へ渡った人物である。その後、咸臨丸艦長として小笠原諸島などの測量にあたり、維新後は工部省に出仕し東京・横浜間鉄道敷設の測量に従事している。1877(明治10)年1月退官し民間人になって、日本の食塩があまりにも粗製と感じ製塩事業に取り組んでいく。その初めが千葉県行徳村における「蒸散屋」(技条架)による製塩法実験であり、以来、製塩の改良実験を積み重ねて製造方法の特許を取得するだけでなく、製造方法を広く全国に普及するために積極的に活動している。

2通の書簡では、仲治郎が小野の製塩法を根本でできないか相談したことで、天日食塩製造や海水焚上塩製造などのマニュアルを伝えている。当時、乾鮑製造には塩を多量に使用するので、清三郎や仲治郎らは自力での製塩を考えていたのだろう。まず、8月7日付書簡【41】には「…天日食塩

製造之義…御来談被下…早速御帰国之上、神田氏江も御相談…同氏方も此程文通有之…」とあり、「天日食塩製造」の方法は、根本だけではなく布良の神田吉右衛門からも相談があったと述べている。根本のことでは「御地ニハ幸天然地盤有之、漏液無之、何寄之事ニ御座候…」と、今の自然のままでも地盤が良いので水漏れがないのがとてもよいと評価している。「…海水濃液…砂之厚サハ二寸五分位…降雨を防ぎ…砂を濃液之海水に致し…一旦濃く相成候上ハ、毎日々々一日毎ニ干シ上ケたる海水丈之塩分ハ、濃液ニ而取…砂を濃液ニいたし…凡日数十日も相懸可…」と、降雨を防ぎながら海水を砂と混ぜて天日で濃縮させる過程を強調している。「…一日毎ニ塩分相増…場所ハ、地盤之上三坪程…通り水留ハ粘土ニ而留、砂ニて日に直ニ当らぬ様…海水ハ手桶杯ニ而汲入…砂の上水厚サ一分、是が干上リ、僅に残りたる時、跡の一分を汲入可…夜中ハ一分位海水を入置…丸て干上ケ候而ハよろしからず、いつも少々つゝハ水の有之…右之仕方にて塩水を取…」と、細心の注意を払って塩分を含んだ砂の扱いと海水の入れ方を指南している。小野は「極々手軽」と述べているが仲治郎はできたのだろうか。なお、「…神田氏江も御相談御回答相願…」と小野が述べているので、仲治郎は神田吉右衛門とは面識があった。「…水産会にて改而御面会…御尊父様江よろしく…」とあるので、大日本水産会の会合で小野と清三郎は会っていたようだ。

9月15日付書簡【200】では「…本年者引続雨天多ニ而、如何可有之候哉、漏水ハ一切無之事ニ相成候哉、地盤之模様ハ何様ニ候哉…」と実験の経過を尋ねたうえで、とくに重要と思われるのが「…塩氣之為ニ凝結いたし候所ハ如何ニ候哉」と、砂地海岸での塩気による凝結ということが実際に「洲之崎方相浜辺之間、又其御地根本之辺」にあったかどうかを聞いている。

その状況では「…多数製造場と相成候義ニ付、御見込被仰遣被下度候」と、多くの製塩場をつくる条件がある述べている。「海水壺升塩ニ焚上塩」はいくらかと尋ねている。これは海水焚上塩製造という方法が海水を鍋に入れて煮詰、少し塩水が残ったところの塩を木ですくい上げ、灰の上に紙を敷き、その上にすくった塩をのせると塩となっていく。試験場にて海水を乾かし、一分位づつの厚さに海水を注ぎ何度にも乾かしていく。砂にも水気が必要で雨水を使って溶かすしかないので注意してほしい。砂の塩砂となると濃厚の塩水になるまでは数日かかると思うが、一旦濃厚になると、日々乾いている濃液は受取ことができると話している。小野は仲治郎に試験場の砂のなかにある塩分はいかかを教えてほしいと結果報告を求めている。小野が仲治郎に「御多事御中御手数相懸候得共、前段御尋合申上候、件々御回答被下度、御願申上候、右之段可申上愚札如是御座候也」と、製塩業実験の結果報告を依頼している。

いずれの書簡が仲治郎宛てなのも、小野には仲治郎が水産伝習所で学び、専門的な水産技術や実習経験があつて信頼のおける頼もしい人物と映つたからだろう。2通の書簡の年は未詳であるが、仲治郎が明治24年に伝習所を卒業し明治26年に平野姓になっている点や、神田吉右衛門の村長在職が明治26～32年の8年間であつた点、小野の活動などからみて、明治26年の8月と9月の書簡と推察している。